

〔課題演習報告〕

家庭と学校で共に育む子どもの学校適応に関する研究  
—SEL-8Sによる人間関係づくりと「共育」の取組を通して—

大 和 和 雄  
Kazuo YAMATO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース  
福岡市立金山小学校

(2016年1月6日受理)

本研究は、子どもの学校適応を促すための方策として、学校では社会性と情動の学習プログラム(SEL-8S)を導入するとともに、家庭では学校の学習と連携した取組を「共育」として継続し、その効果を試行的に検証することを目的とした。研究Ⅰでは、1つの学年の児童および保護者を対象とし、研究Ⅱでは、公立小学校1校の全児童および保護者を対象とした。効果の検証には、小学生用SEL-8S自己評定尺度、学校環境適応感尺度(ASSESS:以下「アセス」)、実践校の保護者による学校評価、本研究に関する保護者アンケート(自作)を実施した。その結果、学校適応に関わる子どもの社会的能力や学校適応感については、特に学習の初期段階で低位群だった子ども達の伸びが見られた。また、保護者の意識や関心については、学校での学習や保護者を対象とした講演会、授業公開、ワークショップ等の取組が回を重ねるにつれて、少しずつ高まっていることが分かった。

キーワード：学校適応，共育，人間関係づくり，SEL-8S

## 1 問題と目的

近年、子ども達の不登校や、学校での問題行動の増加傾向が指摘され、その対策の必要性が唱えられている。中でも校内での暴力行為については、中学生や高校生がほぼ横ばい傾向であるのに対して、小学校ではここ数年で増加傾向にある。また、不登校や問題行動の背景には、対人関係を上手に築けないことからくる学校不適應や、無気力、複雑な家庭環境、親子関係などがあることも指摘されている(文部科学省、2012)。

そのような問題対策の一つとして予防・開発的に心理教育的プログラムが学校において導入され、その効果についてはこれまでも様々な研究によって報告されている。例えば、学校においては、学級単位のソーシャルスキルトレーニングを実施することにより、実施前は学校適応感が低かった児童が、その後適応感が向上したという研究結果もある(大対・松見、2010)。

一方では、家庭の教育力の低下が指摘されるよ

うになり、そのことが規範意識の欠如や学習意欲の低下、不登校などの背景にあるのではないかと指摘もされている(文部科学省、2006)。家庭の教育力向上のための取組、及び学校と連携した取組としては、PTAが主体となって取り組んでいる「早寝・早起き・朝ご飯」運動が盛んに行われている。この取組については、年々保護者の意識の高まりが見られるようになり、活動の広がりも見られるなど一定の成果を挙げている(文部科学省、2007)。

教育基本法にあるように、子どもの教育については、学校と家庭とがそれぞれ役割と責任を自覚するとともに、相互に連携・協力することが求められている。学校で行っている教育活動、心理教育的アプローチをより効果的にするため、また、家庭での教育力をより向上するためには、学校と家庭が連携することが重要であり、その必要性は今日の社会において、ある程度共通認識されていると思われる。

学校と家庭との連携については、福岡市教育委

員会において平成 21 年に「新しいふくおかの教育計画」(10 年間の計画)が策定され、その中でもやはり学校、家庭、地域・企業等がそれぞれ教育の担い手としての責任を持ち、社会全体で共に教育に取り組む「共育(きょういく・ともいく)」という考え方が重視されている。

子ども達の社会性を高めるための学校と家庭との連携については、学級と家庭で行動リハーサルを行ったことで、標的としたスキルについて教師・他者・保護者評定ともに改善されたという結果も報告されている(藤枝, 2006)。また、橋本・小泉(2013)は社会性と情動の学習プログラム「SEL-8S」を学校で導入し、家庭と連携することで、学習プログラムの効果を高め、社会的能力(表 1)の中の「自己への気づき」や、自尊感情の中の「自信・確信の表明」において、実践学級の児童の得点が上昇したりその傾向が認められたりしている。さらに、好意的な意見をもった保護者が多かったことや、学習後に子ども達のスキルが伸びていると実感している記述も見られている。

SEL-8S とは、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を身に付ける学習」を意味する社会性と情動の学習(SEL)の中で、8 つの社会的能力(表 1)の育成を目指した特定の学習プログラムのことである(小泉, 2011)。これらの 8 つの社会的能力を育てるために、各学年において学習単元がそれぞれ構成され、その効果が報告されている(香川・小泉, 2013 など)。また、高学年を対象とした SEL プログラムの実施によって、学校適応促進の可能性も示唆されている(香川・小泉, 2006)。

本研究では、研究 I において公立小学校の 1 つの学年を対象にして試行的に SEL-8S による学習に取り組むとともに、家庭においては、学校で学習した内容と関連した取組を実施することが子どもの社会的能力の向上や学校適応に有効であるのか検証することを目的とする。そのため、実践・協力学級の 2 学級で SEL-8S による学習を進めるが、家庭との連携については、はじめは実践学級だけで取り組む。協力学級については、はじめは

連携を行わずに待機をしておき、途中から連携を始めるようにする。

さらに、研究 II においては公立小学校 1 校全校を対象として SEL-8S による学習に取り組み、家庭との連携についても取り組む。

なお、著者は研究 I では、実践学級担任と共同で学習を進めたり、家庭との連携を支援したりした。また、研究 II では、人権教育部の中に「人間関係づくり担当」として位置付けられ、校内推進及び家庭との連携についての計画と支援にあたった。

## 2 研究 I

### 目的

公立小学校の 1 つの学年を対象に試行的に「共育」として学校では SEL-8S による学習に取り組み、家庭では SEL-8S に関する学習内容と関連した取り組みを行い、その効果を検証する。

### 方法

#### (1) 研究時期

2014 年 9 月～2015 年 3 月

#### (2) 調査対象者

A 県内の公立小学校 1 校の 5 年生 2 学級の児童を対象とした。1 つの学級(24 名)を家庭との連携に取り組む実践学級とし、もう 1 つの学級(24 名)を連携はしない協力学級とした。なお、SEL-8S による学習には実践学級・協力学級共に取り組んだ。なお、保護者についてはどちらの学級も対象とした。

#### (3) 調査内容

##### ①小学生版「社会性と情動」の尺度

「小学生版『社会性と情動』の尺度」(田中・真井・津田・田中, 2011)を用いて、SEL-8S 学習プログラムの 8 つの社会的能力(自己への気づき、他者への気づき、自己コントロール、対人関係、責任ある意思決定、生活上の問題防止スキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動)を測定した。

##### ②学校環境適応感尺度

栗原・井上(2010)の「学校環境適応感尺度 (ASS:ESS:Adaptation Scale for School Environments Six Spheres)」を実施し、生活満足感、教師サポート、友人サポート、非侵害的關係、向社会的スキル、学習的適応の 6 因子について、測定した。

##### ③人間関係づくり学習に対する保護者アンケート

保護者を対象として、人間関係づくり学習に対す

表 1 SEL-8S で育成する 8 つの社会的能力

基礎的社会的能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己への気づき</li> <li>・他者への気づき</li> <li>・自己のコントロール</li> <li>・対人関係</li> <li>・責任ある意思決定</li> </ul>
応用的社会的能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活上の問題防止スキル</li> <li>・人生の重要事態に対処する能力</li> <li>・積極的・貢献的な奉仕活動</li> </ul>

表2 保護者用アンケート項目

1	子どもと「人間関係づくり学習」について話をしましたか。
2	家庭で実際に「人間関係づくり学習」で学んだことを一緒にやってみましたか。
3	学習を通して子どもの姿が変わりましたか。
4	「人間関係づくり学習」について他の保護者と話をしましたか。

表3 保護者による学校評価項目

・学校の教育方針や教育活動を理解している。
・授業参観・学級懇談会・PTA活動に、積極的に参加している。
・共育プロジェクトに参加しようとしている。
・学校・学年便り・連絡文書は読むようにしている。
・担任の教育方針について理解している。
・子どもとよく話(学校のこと・相談)をしている。
・地域の行事には参加するようにしている。

表4 5年生の学習単元

基本的生活習慣	・あいさつ「こんにちは」(9月) ・金銭管理「おこづかい」(12月)
関係づくり	・自己制御「ちょっと落ち着いて」(10月) ・問題解決「トラブルの解決」(12月)
ストレスマネジメント	・ストレス対処「リラックスして」(11月)

る理解度や意識を把握するために保護者用アンケートを作成した。表2で示す項目について4件法(1~4点)で回答を求めた。

#### ④保護者による学校評価

毎学期末に対象校で実施している保護者による学校評価のうち、保護者自身に関する項目を取り出し、7月と12月と3月の合計3回分を使用した。評価項目については表3に示す。

各項目について4件法(1~4点)で回答を求め、それらの平均を算出した。

### (4)手続き

#### ①調査

児童に関する調査は、2014年9月(事前)、12月(事後)の2回、実践学級・協力学級ともに実施した。いずれの調査についても、児童が自分の行動を自己評価した。

また、実践学級の保護者を対象としたアンケートについては、人間関係づくり学習を始めた段階の10月と、実際に保護者にワークショップ体験してもらった後の12月に実施した。

#### ②SEL-8Sによる学習の位置づけ

実践学級における、5年生を対象とした学習単元構成を表4のように選定した。なお、これらの学習単元については、学校行事や、各教科・領域と関連させて実施できるようにした。学校行事と関連した学習プログラムの実施についても、これまでの研究の中で、対人関係や積極的・貢献的な奉仕活動の評定が高くなることが報告されている(宮原・小泉, 2009)。

#### ③家庭との連携(実践学級のみ)

##### a. チャレンジカードに取り組む週間の設定

10月、11月、12月の各月に1週間ずつ、学校

で学習した内容に関するチャレンジカードを配布し、各家庭で取り組んでもらった。内容は3回ともSEL-8Sの学習ユニットである、「あいさつ『こんにちは』」から、挨拶のポイントである「お・か・め(おおきな声で・からだを起こして・相手のめを見て)」を意識して挨拶することにチャレンジすることとした。チャレンジカードには、毎日の子どものふり返りと、1週間をふり返っての保護者からのコメント欄を設けた。ふり返りでは、ポイントを意識して挨拶ができれば◎、意識はあまりしていないが挨拶はできたら○、あまり挨拶できなかったら△というように3段階でのふり返りを行っている。

##### b. 保護者対象のSEL-8Sワークショップ

保護者に対してSEL-8Sによる学習についての理解を促し、家庭での取組に活用してもらえるように、12月の学級懇談会の場で約20分間の保護者向けワークショップを実施した。内容については、12月に学習した「問題解決『トラブルの解決』」を取り上げた。子ども達と同様に、トラブルを解決するためのコツとして「トラブル4兄弟」を提示し、それを意識して課題を解決するということに取り組んでもらった。

##### c. 人間関係づくり学習に関するポスターの配布

チャレンジカードに取り組む週間と連動して、各家庭に挨拶のポイント「おかめ」のポスター(A4判・カラー印刷)を1家庭1枚ずつ配布した。ポスターにはポイントだけでなく、子ども達が一人ずつ、挨拶に関するめあてを記入する欄を設けて、持ち帰るようにした。子ども達がめあてを記入することで、日常的に意識することができるようにすると共に、家庭での保護者の言葉かけにも繋げられることをねらいとして配布を行った。

##### d. 学級通信で学習内容に関する情報発信

実践学級の学級通信に、学習の様子、子ども達の感想、保護者アンケートの結果、保護者の感想を、学習後を中心に掲載してもらった(不定期)。時期は10月から12月の2ヶ月間行った。また、保護者ワークショップの実施については2ヶ月前から告知を行い、直前に改めて詳細を伝え、より多くの参加を促すようにした。

### 結果と考察

子どもの社会的能力については、はじめから学習・連携ともに取り組んだ実践学級において、基礎的、応用的社会的能力のいずれにおいても一定の向上が見られた(図1)。また、実践学級において保護者を対象としたワークショップに参加した家庭の児童は、不参加だった家庭の児童の社会的

能力と比較すると、いくつかの能力において有意に高い数値を示していた（図 1）。このことから、保護者の意識が子どもの社会的能力に何らかの影響を与えているものと考えられた。

保護者に対するアンケートの結果からは、実践学級において人間関係づくりの学習について話す機会が増えたり、家庭で実際にやってみたりするというところまでは至っていなかった（図 3）。また、学校評価の保護者自身に関する項目の結果からも、特に学校の教育活動への理解が深まったり、「共育」への関心が高まったりするという結果は得られなかった（図 4）。

子どもの社会的能力については、SEL-8S による学習を年間 7 回以上実施することで効果が見られるという結果が報告されている（小泉・山田・箱田・小松，2013）。研究 I において、実践学級では学習の回数が 5 回であったものの、一定の向上が見られたことは、家庭との連携が子どもの社会的能力の育成にある程度有効に働いていたのではないかと考えられる。

一方で保護者の意識にあまり差が見られなかったことについては、学習と連携の内容が結び付いておらず、家庭での意識化が難しかったことが要因ではないかと考えられる。学校で「おこづかい」の学習をした月でも、家庭でのチャレンジカードの取組は挨拶だったような月もあった。家庭との連携を有効に進めるためには、学習内容との関連が必要であったと考えられる。また、保護者の連携に対する意欲、学習参観・懇談会の参加状況等には差が見られ、学校の教育活動に積極的でない保護者に対するアプローチの方法が不十分であったことが考えられる。

### 3 研究 II

#### 目的

公立小学校 1 校を対象に、学校では SEL-8S による学習に取り組み、家庭では「共育」の一つとして SEL-8S に関する学習内容と関連した取り組み

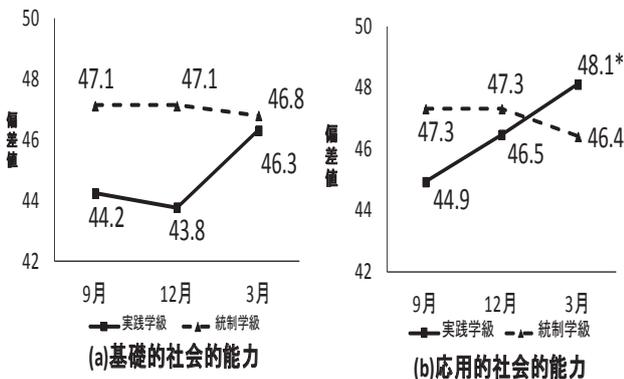


図 1 小学生版社会性と情動尺度「基礎的・応用的」社会的能力

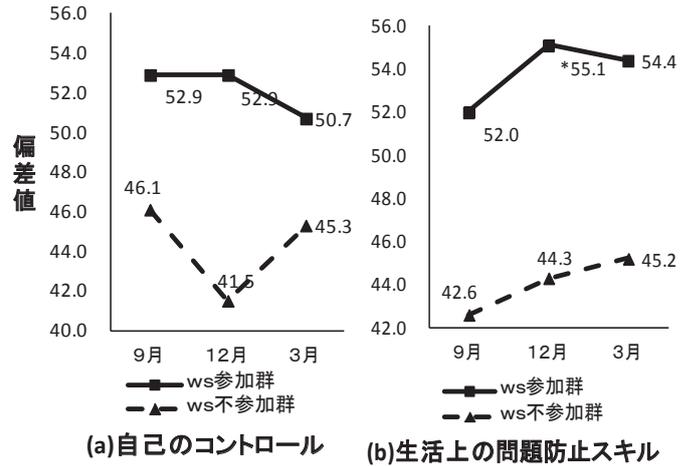


図 2 保護者ワークショップ参加・不参加群の子どもの社会的能力

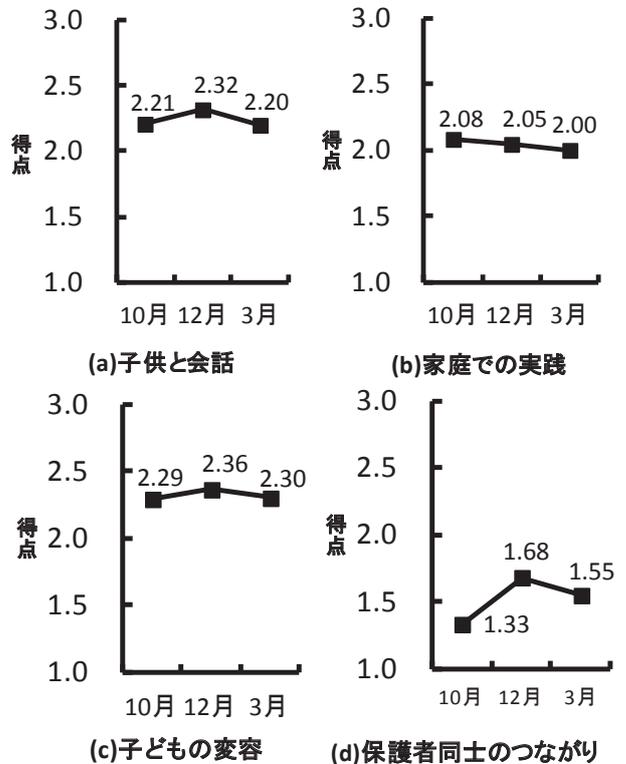


図 3 実践学級保護者アンケートの結果

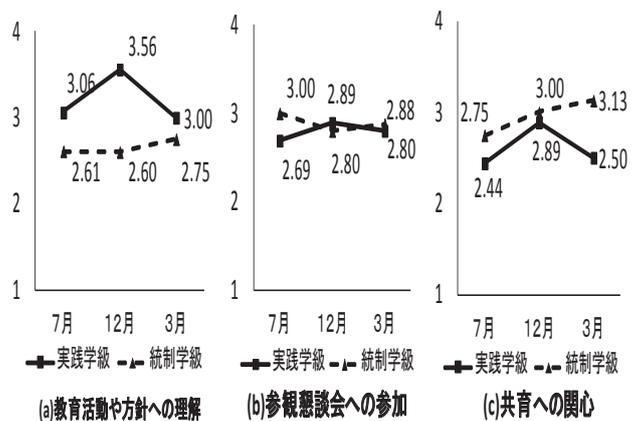


図 4 実践学級保護者による学校評価の結果

を行い、その効果を検証するとともに、有効な連携の方法について明らかにする。

**方法**

**(1) 研究時期**

2015年4月～2016年4月

**(2) 調査対象者**

実践校は、A県内公立小学校1校の児童271名(1年生;49名,2年生48名,3年生45名,4年生40名,5年生42名,6年生47名)。協力校は、A県内公立小学校1校の3年生以上の児童379名(3年生93名,4年生103名,5年生79名,6年生104名)。なお、協力校ではSEL-8Sによる学習には取り組んでいない。

**(3) 調査内容**

- ①小学生版「社会性と情動」の尺度
- ②学校環境適応感尺度
- ③人間関係づくりの学習に対する保護者アンケート(実践校のみ)
- ④保護者による学校評価(実践校のみ)

**(4) 手続き**

**① 調査**

児童に関する調査は、2015年6月(事前)、12月(事後)の2回、実践校、協力校ともに実施した。いずれの調査についても、児童が自分の行動を自己評価した

また、実践校の保護者を対象としたアンケートについても児童同様に2回実施した。

**② SEL-8Sによる学習の位置づけ**

実践校の各学年において、SEL-8Sによる学習の年間指導計画を作成した(図5)。なお、年間指導計画作成にあたっては、学級活動や道徳、総合的な学習の時間等、これまで指導計画に位置付けられていたものと関連させて実施できるようにした。いずれの学年においても年間10時間の学習に取り組むこととした。推進は人権教育部の人間関係づくり担当が中心となって進めている。

また、各学級での学習の実施についてチェックができるようなチェックシート(図6)を作成し、進捗状況を確認しながら推進できるようにした。

**③ 家庭との連携**

研究Ⅱにおいては、研究Ⅰにおいて実践学級で取り組んだ連携内容に加えて、以下の内容を重点に家庭との連携に取り組むこととした。

**a. 職員研修における家庭との連携モデルの提示**

実践校での職員研修において、1学期の実践をもとにしながら、学級担任としてどのように家庭との連携を進めたのか、今後どのように連携を進

めていく計画なのかを、連携モデルとして提示して、全体での共通理解を図った(図7)。

保護者との連携を進めるにあたっては、まず事前の告知の際に、学級通信・学年通信等を使ってお知らせするのみではなく、各学級のPTA学年学級委員に内容を伝えておき、周知することとした。次に、実際に保護者を対象としたワークショップを実施し、その時の感想や意見、様子については通信等でフィードバックすることとした。そして、子どもの学習と関連したチャレンジ週間に取り組んだ際にも、家庭での様子や保護者の感想をフィードバックして、関心を高めてもらえるようにした。

このようにSEL-8Sプログラムによる学習と、家庭でのチャレンジ週間や保護者ワークショップ等の連携を1セットにして実施することで、保護者の意識や関心を途切れさせないようにすると

年間指導計画(中学年)		
※特別支援学級…各学年の内容と同じ。子供の実態に応		
3年		
月	SEL-8Sの学習内容	教科・領域 単元等
4	(A6)生活リズム「早寝早起き朝ご飯」	体育(保健)「健康な生活」
5	(A5)あいさつ「おはよう、こんにちは、さようなら」	学活「あいさつをしよう」
6	(B4)他者理解「しっかり聞こう」	国語「質問をしたり感想を言ったりしよう」(5月計画)
7	(F5)誘拐防止「こんなときは注意!」	学活「夏休みの過ごし方」

図5 SEL-8Sプログラムによる学習の年間指導計画(一部)

○終わったところにチェックを入れられるようにしています。進捗状況	
授業	<input checked="" type="checkbox"/> 4月分学習(4~6年生) <input type="checkbox"/> 5月分学習 <input type="checkbox"/> 6月分学習 <input type="checkbox"/> 7月分学習
アンケート	<input type="checkbox"/> アセス <input type="checkbox"/> 小学生版社会性と情動尺度 ※6月第1週~第2週で実施をお願いします。
チャレンジカード	<input type="checkbox"/> 4月学習分チャレンジカード(4~6年生) <input type="checkbox"/> 5月学習分チャレンジカード <input type="checkbox"/> 6月学習分チャレンジカード
※チャレンジカードについては、各学年にあるKKTの保管ケースには手元に届いていない時は、大和までお知らせ下さい。	
○授業実践記録…授業後の簡単な記録にお使い下さい。夏季研修いたします。	
成果	
例:授業後、あいさつの仕方が変わった。	例:指導

図6 進捗状況チェックシート

もに、保護者自身の関与性を高めることをねらいとした。

### b. PTA活動（成人教育委員会や学年学級委員会）との連携

保護者を対象とした人間関係づくりについての講演会やポスター配付を、PTAが主体となって進められるように支援・啓発を行った。

まず、その一つとして6月に開催されたPTA成人教育講演会において、福岡教育大の教授を招いて人間関係づくりの学習についての講演会を実施した。この講演会の実施にあたっては、実践校のPTAが中心となり、講師との打ち合わせから、実際の講演会の準備・進行、アンケートの集約等を行うようにした。

講演会後の感想では、「子ども達が受けた同じ内容を受ける講演だったので、子ども達がいろんな学習をしているのだと知ることができたので良かった。家で子供と話してみたいと思います。」といった、学習との関連を意識した感想も見られた。

### c. 保護者を対象とした人間関係づくりの授業公開

保護者が実際にSEL-8Sプログラムによる学習がどのようなものかを参観し、人間関係づくりの学習でどのような内容を学習しているのか知るために、学校公開週間や学習参観において全学級1度は必ず授業公開することにした。実際には、2学期の授業参観(9/11)、学校公開日(11/1)、人権学習参観(12/4)において、各学級での授業公開を行っている。また、授業公開を行う際には、図7で示した連携モデルに基づいて、あらかじめ学習のねらいや内容について告知した上で学習に取り組むこととした。

学習後には、学習中の子ども達の様子を伝えるだけではなく、その後の学校生活での様子を知らせたり、学習後の子ども達の感想等を学級通信等で知らせたりするようにした。

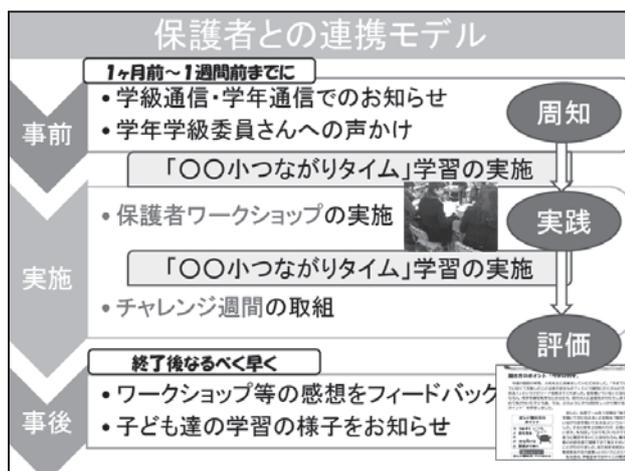


図7 保護者との連携モデル

## 結果と考察

### (1) 小学生版「社会性と情動」の尺度

実践校および協力校を対象として、事前評定の8因子の偏差値の合計点をもとに、平均と標準偏差を算出した。平均より標準偏差の1/2以上の群を高位群、平均より1/2以下の群を低位群、その中間を中位群として設定した。それぞれの群の、8つの因子の得点と、事前(6月)および事後(12月)の調査の変化量を算出し、連携(実践校・協力校)×初期高低群(高・中・低群)の2要因の分散分析を行った。

その結果、実践校と協力校の間での家庭との連携の有無による有意差は一部で見られたものの、限定的なものだった。一方で、実践校のいずれの学年においても、高位群よりも低位群において、社会的能力の伸びの傾向が見られた。特に4年生においては、ほとんどの社会的能力で群間に有意差が見られ、低位群の方が有意に上昇していた

(例：図8)。実践校の4年生では、図7で示したような連携モデルを意識した実践が行われ、学級通信等による子どもや保護者へのフィードバック等が適切に行われていた。この取組が低位群の伸びに有効に働いていたと考えられる。また、連携の有無による差はあまり出なかったものの、年度当初より保護者に対して人間関係づくりの学習を啓発したり、家庭との連携を進めたりしたことも低位群の子どもの社会的能力の伸びに影響していたと考えられる。

### (2) 学校環境適応感尺度

小学生版「社会性と情動」の尺度をもとに分類した高位群、中位群、低位群を学校環境適応感尺度における高・中・低位群としてその変化量を算出した。

その結果、「社会性と情動」の尺度の結果と同様、高位群よりも低位群の方が、適応感が高まる傾向にあるということが分かった。

### (3) 保護者アンケート

1回目のアンケート実施では、4つの項目全てにおいて平均が1点台という結果だったのに対して、2回目のアンケート実施では、全ての項目において上昇が見られ、3つの項目において2点台に上昇していた。

また、2回目のアンケートでは、今年度重点的に実施した、成人教育講演会や保護者ワークショップ、SEL-8Sによる学習の授業参観への参加の有無を尋ねる項目を追加して実施した。項目として設定した行事や参観に全て参加した保護者の群を

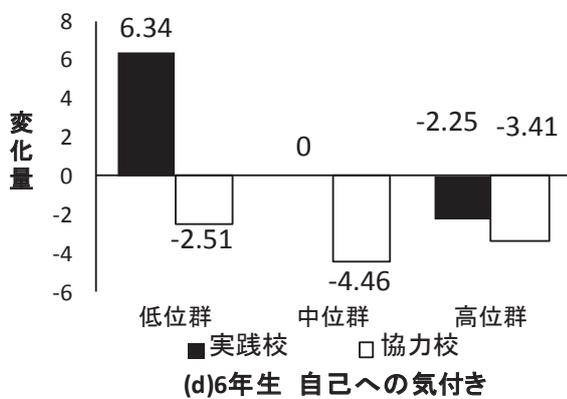
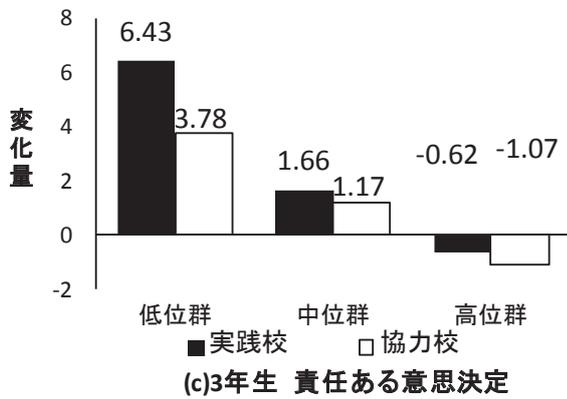
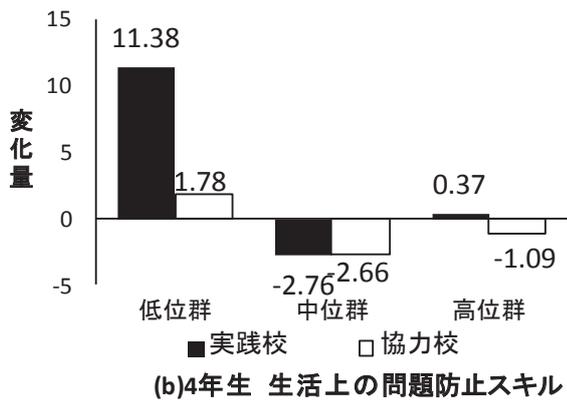
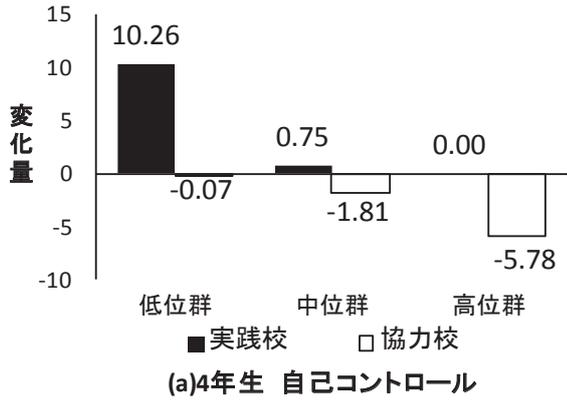


図8 社会的能力の変化量 (一部)

(注；事前評定における低・中・高位群ごとの社会的能力偏差値の事前と事後の変化量を表す。)

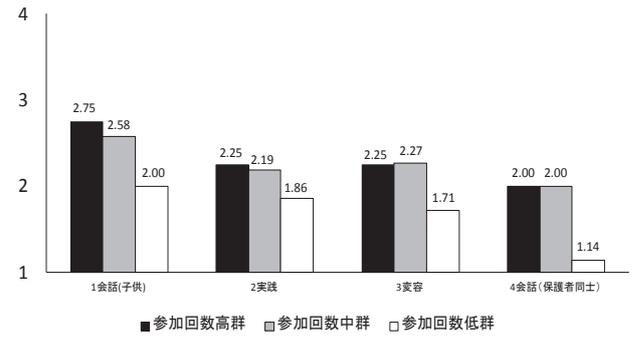
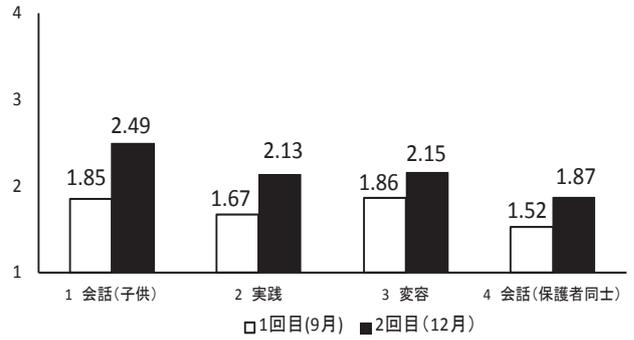


図9 保護者アンケート結果

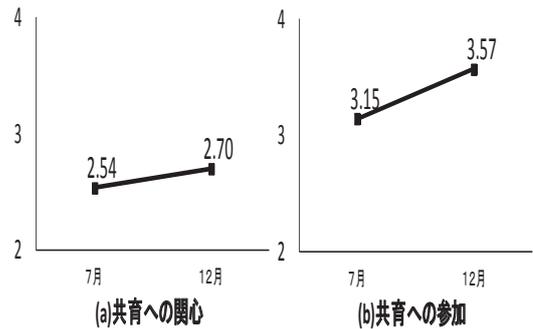


図10 保護者による学校評価の結果

高群，一部参加した保護者を中群，一度も参加できなかった保護者を低群として設定した。その結果，図9に示すように参加回数高群・中群の方が低群よりも，高い数値を示していた。

#### (4) 保護者による学校評価

研究Iと同様に4件法で回答を求め，その結果から平均を算出した。1学期末(7月)と2学期末(12月)の2回を比較すると，教育活動や方針に対する理解や学習参観懇談会へ参加はほぼ横ばいだった。それに対して，「共育」に対する関心や実際に「共育」への参加についての項目では，それぞれ1学期末よりも2学期末の方が数値が上昇していた(図10)。特に「共育」への参加については，6/6の成人教育講演会や11/1の学校公開(授業公開)に参加したという回答が多く，保護者の関心が行動に繋がっているものと考えられる。

なお，実践校で取り組んでいる「共育」に対す

る関心は、1学期末に52%が「できている」「だいたいできている」と回答していたものが、2学期末では59%となっていた。この数値については、実践校における学校評価の経年比較を行ったところ、SEL-8Sによる学習と連携を始める1年前の平成25年12月では31%だった。このことから、連携を始めたり、継続したりすることで、保護者の「共育」に対する関心が少しずつではあるが、高まりつつあるということが分かった。

#### 4 総合考察

研究Ⅰで課題として残ったSEL-8Sの学習回数の不足や、家庭における実践と学校の学習内容のズレを解消するために、研究Ⅱでは、全校的に教育活動に位置付け、学習内容と関連した取組を家庭で実践できるようにした。

子ども達の社会的能力や学校適応感については、特に低位群の子ども達にとって伸びが見られ、社会的能力や適応感が低い子どもにとって、予防開発的な心理教育プログラムの導入がある程度有効であることが示された。一方で、高位群については、上昇が見られることは少なかったことから、高位群に対する何らかの支援が必要であることが考えられる。江頭・高松(2014)は、適応感が低位の子どもについては、担任へのコンサルテーションが間接的に有効であったことを示しながら、高位群の子どもに対しても同様にコンサルテーションが必要であるとしている。教育プログラムの実施にあたっては、学級間差についても触れられることがあることから、各学級担任が学習や取組を円滑に進めるためのサポートが必要になってくると思われる。また、学年の発達段階に応じた連携を進めることが必要であることも考えられる。高学年の子ども達にとって、挨拶や人との関わり方について学校で学んだことを家庭でも保護者から繰り返し言われることを敬遠する場合も考えられる。高学年の子どもに合わせた学校と家庭を繋げる進め方として、例えば、自分で家庭での目標を自己決定し、その達成度を保護者に見てもらうような方法を今後検討する必要がある。

また、保護者の「共育」として取り組んだ学校との連携に対する意識や関心については、全校的な学習の実施や取組が一定程度行われることで、徐々にではあるものの向上していることが示された。実際にSEL-8Sによる学習を参観してもらった後やPTAが主体となって実施した講演会の後では、保護者の理解が高まっていたことから、

学校からの働きかけとして学習を公開することや、PTA活動と連携して取組を進めることは有効であると考えられる。一方で、保護者と連携を有効に進めるためには、各学級担任が取組等に関する周知や評価を適切に行うことが必要である。今後は学校全体で保護者との連携についての共通理解を進めつつ、よい連携のモデルや学級担任の実践事例を共有しながら、学校が組織として連携を進めることができるような体制の整備やマネジメントが必要になる。例えば、各学年において推進が円滑に行われるように、学年内での人間関係づくりの学習の推進担当者を決定し、学年会の中で推進状況等について担任同士で確認や検討をする時間を設定することが考えられる。

#### 主な引用・参考文献

- 福岡市教育委員会 2009 新しいふくおかの教育計画
- 藤枝静暁 2006 小学校における学級を対象とした社会的スキル訓練および行動リハール増加手続きの試みカウンセリング研究, 39, 218-228.
- 橋本智恵・小泉令三 2013 対人関係能力を育て自尊感情を高めるための社会性と情動の学習プログラム実践 福岡教育大学紀要, 62, 155-168.
- 香川雅博・小泉令三 2006 小学生における社会性と情動の学習プログラムの効果 日本教育心理学会総会発表論文集, 48, 122.
- 小泉令三 2002 学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ 教育心理学研究, 50, 237-245.
- 小泉令三 2011 社会性と情動の学習(SEL-8S)の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 栗原慎二・井上弥編著 2010 アセスの使い方・活かし方 ほんの森出版
- 文部科学省 2012 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 大対香奈子・松見淳子 2010 小学生に対する学級単位の社会的スキル訓練が社会的スキル、仲間からの受容、主観的学校適応感に及ぼす効果行動療法研究, 36, 43-55.
- 田中芳幸・真井晃子・津田彰・田中早 2011 小学生版「社会性と情動」尺度の開発 子どもの健康科学, 11, 17-30.

#### 謝辞

本研究を行うにあたり、機会を提供していただいた福岡県教育委員会及び福岡市教育委員会の皆様にご心より感謝申し上げます。また、実践校および協力校の校長先生をはじめ、関係の諸先生方には多大なるご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます、謝辞と致します。